

## 第 14 回講義 20180727

§ 10 グライスの「非自然的意味論」と「協調原理」

§ 11 コミュニケーションの不可避性と私的言語批判

§ 12 社会構築の二種類の説明

1. 「地位機能宣言発話」による社会制度の構築の説明

2. 「協調の原理」による社会構築の説明

§ 13 資本主義と近代国家と近代科学

1. 産業資本主義による伝統的共同体の解体と近代的個人の誕生

2. 資本主義と近代科学

(1) なぜヨーロッパにだけ自然科学が誕生したのか？

(2) 資本主義と近代科学の類似性

#貨幣の3つの機能：価値尺度、商品交換、価値退蔵

#科学の3つの機能：現象の説明、現象の予測（技術への応用）、世界観の提供

先週ここまで。

## § 14 もう一つの社会構築主義

### 1. 社会科学の方法論

# 人文社会科学：二重の解釈学

クワインが指摘したように、観察と一致する自然科学の理論は、複数可能であり、その中のどれを選択するかは、プラグマティックな観点から行われる。その選択は、科学者の属する社会文化の価値観に基づいて行われる。この点は、人文社会科学も同様であり、複数の整合的な理論が可能であり、どれを選ぶかは、プラグマティックな観点から行われる。

しかし、自然科学と人文社会学では異なる点がある。社会科学の対象である社会現象や社会制度は、人々の認識や行動によって構成されているものである。社会はそれ自身が、人々の社会についての解釈によって構成されている。例えば、お金は、人々がそれをお金として理解して、お金として扱うことによって、お金として通用する。お金は、人々の者解釈によってお金として構成されている。経済学は、そのように既に人々の解釈によって成り立っているものについての解釈として成立する。

社会科学の対象は既に解釈されたものであり、社会科学は、解釈されたものについての解釈学、つまり「二重の解釈学」である。

#自然記述のアポリア

自然科学は、自然現象について正確に記述しようとするが、自然そのものは、非言語的なもの、非概念的なものである。それゆえに、言語による記述は、自然現象に一致すること

も一致しないこともない。どのような記述を正しい記述とみなすかは、自然科学にとっての重大な問題である。

これに対して、社会科学の場合には、対象そのものが言語で構成されているので、それについての記述が正しいことを説明することは簡単である。

### #ギデンズの「二重の解釈学」

ギデンズ『社会学の新しい方法規準』（松尾精文、藤井達也、小幡正敏訳、而立書房、2000年）は、自然科学が一重の解釈学であるのに対して、社会学が二重の解釈学であるという。（人文社会科学一般もたまたま、二重の解釈学だと言えらるう。）

「自然的世界は、自らを有意味な世界として組成していない。」144

「社会生活は、その構成員である行為者たちが自らの経験を体系化するための意味の枠組みの能動的組成と再組成を通じて、まさに<生産>される。」145

「社会学の概念図式は、一般の行為者による社会生活の生産で必要とされる意味の枠組みの中に入り込み、その枠組みを把握するだけでなく、こうした枠組みを専門的概念図式で必要とされる新たな意味の枠組みのなかで組成しなおすこととも関係する、《二重の解釈学》を表出している。」145

「社会学は、社会的行為者自身が意味の枠組みの中ですでに組成している世界を研究対象としており、したがって、日常言語と専門用語を媒介にして、こうしたいみの枠組みを、社会学そのものの理論図式のなかで再解釈していく。この二重の解釈学は、その結びつきが単に一方的ではないために、かなり複雑である。社会学で構築される概念には、連続的な「ずれ」が存在する。その「ずれ」によって、……人々の行動の<有する>不可欠な特性となる傾向がある。」276

## 2、二種類の社会構築主義

### ①弱い社会構築主義

自然は私たちの自然についての理解や表象から独立に存在している。社会は、このような自然の上に、私たちによって構築される。（サールの立場）

（例えば、セックス（自然的な性差）とジェンダー（社会的な性差）を区別し、後者だけが社会的に構築されていると考える立場）

### ②強い社会構築主義

自然と社会を分けたときの、社会だけでなく、自然もまた社会的に構築されている。

自然は、私たちの自然理解や自然科学によって、捉えられたものである。自然理解や自然科学は、私たちの文化的な所産であり、社会的に構築されたものである。

(例えば、セックス (自然的な性差) とジェンダー (社会的な性差) の区別自体が、社会的に構築されたものであるとし、セックスもジェンダーも社会的に構築されていると考える立場)

### #強い社会構築主義の例：ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』（原著 1990、竹村和子訳、青土社、1999）

「セックスそのものがジェンダー化されたカテゴリーだとすれば、ジェンダーをセックスの文化的解釈と定義することは無意味となるだろう。ジェンダーは、生得のセックス (法的概念) に文化が意味を書き込んだものだと考えるべきではない。ジェンダーは、それによってセックスそのものが確立されていく生産装置のことである。」 訳 29

「セックスを前一言説的なものとして生産することは、ジェンダーと呼ばれる文化構築された装置が行う結果なのだと理解すべきである。」 訳 29

弱い社会構築主義は、自然科学が、私たちの表象から独立している実在を、おおよそ正しくとらえているという自然科学観を前提している。しかし、これに対しては、次の反論がある。

### #ブルアの「ストロング・プログラム」

ブルア (David Bloor) Knowledge and Social Imagery (邦訳『数学の社会学』) は、科学知識社会学を研究する上での、4つの信条からなる「ストロング・プログラム」を主張した。

- (1) **因果性**：科学知識は社会的な原因を含む様々な原因によって生成される
- (2) **公平性**：正しい (合理的な) 信念も間違った (不合理な) 信念も、どちらも説明を要する。
- (3) **対称性**：正しい信念も間違った信念も同じタイプの原因によって説明される
- (4) **反射性**：以上の三つの前提は社会学自身にも適用される。

## 3、社会科学特有の困難

### #プラグマティックな理論選択

自然科学でも人文社会科学でも、理論選択のときのプラグマティックな関心は、人の社会的ポジションによって異なるだろう。このことが人文社会科学では、利害関心は、社会内の対立するグループ間で、異なることがあり、身分の対立や階級の対立やグローバリズムとナショナリズムの対立、などで異なっているとき、グループによって、どの社会理論を選択するかが異なることがありうる。理論闘争を行うとしても、自然科学のパラダイムの共約不可能性の場合と同様に、理論的には決着がつかない。そうすると、社会的な力関係によって、どちらの理論が優勢になるかが決まることになる。

### #社会科学に顕著な困難

社会現象の理解は、理解者の社会的な利害関係によって異なってくる。社会の中に、身分の対立、階級の対立、貧富の格差、世代の違い、ジェンダーの差異、などが、深刻な利害の対立をもつとき、社会理解についても対立を生じさせる。この対立を解消するために、

公共的な議論、理論闘争、などが重要になるが、しかし深刻な社会的なコンフリクトがある時、原理的には、理論的に解決することはできない（パラダイムの共約不可能性、観察の理論負荷性、が生じているから）。

## # 社会問題の社会構築主義

アメリカの社会学者マートンは、社会はシステムであり、社会問題とは、社会システムが逆機能を起こしていることであると考えた。社会問題が何であるかを認識するには、社会システムについて正しく客観的に認識し、それに基づいて、どのような現象が逆機能を起こしているかを客観的に認識する必要がある。

しかし、このような客観的な社会認識は成立しない。なぜなら、対象をあるシステムとして見ることは、対象をあるパースペクティブから見ることであり、どのようなシステムとして捉えるかは、研究者の関心に依存している。したがって、何が社会問題であるかも、研究者の関心や視点に依存する。

このことを次のように言い換えることもできる。M. Weber は、社会学研究は、特定の価値や関心に基づいて行われるのではなく、どのような価値観からも価値自由に、客観的に行われるべきだと主張した。しかし、人は価値自由の立場に立てない。パトナムによれば、自然科学や数学ですら、一定の価値判断（簡潔さ、有用性、など）を必要としている。

従って、社会問題は、社会学者によって客観的に認識されるものではなく、人々のクレミング活動によって構成されるものである。多くの人々がクレームを申し立て、そのクレームが社会的に認められるとき、それが社会問題となる。このようなクレミング活動によって社会問題が構成されるという指摘が、社会構築主義の代表的な仕事である。

社会構築主義は、現象学的社会学者のバーガー＝ルックマン『日常世界の構成』などを先行研究としている。

## 4 社会構築主義の区別

社会そのものが社会理解によって構築されている（社会構築主義）

社会は、どのように構築されているのか。

① 約束や契約によって、あるいは「地位機能宣言発話」（X counts as Y in C）によって、成立している。サール、近代の国家契約説

② 約束モデルではない社会構築主義

約束の成立、約束の主体としての個人の成立、などを説明する社会構築主義

「社会はどのように構築されているのか」の探求は、二重の解釈学になる。

## # 近代的個人の社会的構成

近代の国家契約論や、サールの社会構築主義は、近代的個人の存在を前提している。キツセなどの社会問題の社会構築主義もまた、クレーム申し立て活動を前提する点で、申し立てる個人の存在を前提している。しかし、近代的個人の社会的公正を約束によって説明することはできない。なぜなら、約束は約束する個人の存在を前提することによって成立するからである。

## #セックス／ジェンダー／欲望の社会的構築

フーコー、バトラーは、性や性差が、社会的に構築されることを指摘した。これは、近代的個人そのものが、社会的に構成されている、という主張につながるだろ。

#市場で交換を行うことによって、交換の主体として個人が構成される。個人が貨幣所有者となることによって、個人が解決でき、解決すべき「個人的問題」や「私的な領域」が誕生する。産業資本主義によって、個人が社会的に構成される。

(注：近代において、法と道徳は分離し、法は、国家の統合、道徳は個人の統合（アイデンティティ）に関わるものとなる。感情は、個人の領域のものとされる。ロマンティック・ラブの登場)

(注：国家契約説では、自然権を持っていた個人が、自然権を国家に譲渡して、代わりに国民としての安全の保障などの権利を受け取ることが、国家契約である。自然権を持っていた個人が国家契約によって、明示的に権利の主体となる。「自然権を持っている個人」は、産業資本主義によって可能になったフィクションである。)

市場での交換は契約である。したがって、それは自由な個人を前提しているのではないか？ ここに、制度が先か個人が先か、という問題が生じる。

## #選択の二つの不可避性

選択肢が与えられたとき、あるいは、選択肢を意識したとき、どれかを選択することが不可避になる。

なぜなら、何もしなくても、何かを選んだことになるからである。何もしないことは、「うどんにしますか、そばにしますか？」と問われたとき、答えないことは、何も注文しないことであり、それは与えられた選択肢には含まれていない。しかし、「うどんにしますか」と問われたときに答えないことは、うどんを注文しないことであり、「いいえ」と返答することと同じであり、その選択肢は問いの中で暗黙的に与えられている選択肢である。

事実の記述を求める問いは、「あなたの好物はなにですか？」という問いは、選択肢を枚挙していない。しかし、暗黙的に全ての食べ物が選択肢として想定されているということもできる。

(自問自答においても、問いを設定したならば、それに答えることは不可避になる。それは他者から迫れるからではない。自分で行為を選択したということは、自由な行為の構成要件である。)

自由な行為は自由な意志決定の結果である。自由な意志決定は、自由な選択をするということである。私たちは、多くの場合、行為決定を自覚的に行っている。それは、選択肢を意識ながら、その上での一つを選択しているということである。言い換えると、選択肢を意識したときには、選択は不可避である。)

ここには二種類の不自由がある。

①与えられた選択肢の中から選択しなければならないという不自由がある。

②選択しなければならないという不自由がある。

この二つの不自由は、次の二つの「不可避性」だということもできる。

③与えられた選択肢の中から選択しなければならないという不可避性

④どれであれ、選択しなければならないという不可避性

ただし、選択できるという限りにおいて、選択は自由である。

このような選択の不可避性が、自由な選択者としての個人を構成する。たとえば、市場があり、選択肢が示されるとき、私たちが選択することは不可避になる。社会が私たちに様々な選択肢を提供する時、私たちがが選択することは不可避になり、私たちは、個人として、契約の主体として構成される。

## 注：Gidens の構造化理論

### #方法論的個人主義と方法論的集合主義の解決

「構造化理論が目指した目標を一言でいえば、方法論的個人主義と方法論的集合主義、個人と社会、行為と構造といった形で語られてきた「社会学的方法論をめぐる百年戦争」に終止符を打つこと」（名部圭一）である。

構造を、デュルケーム的に行為者に外在し、行為者に先行し、制約する者として、とらえると、構造が、諸個人によって構成されることが説明できない。方法論的個人主義から構造の構成を説明すると、近代的個人の成立を説明できない。

### #構造の二重性

「構造は行為の媒介であると同時に結果でもある」という構造の二重性（duality of structure）のテーゼを主張する。

「構造の二重性という考え方に従えば、社会的システムの構造特性は、それが再帰的に組織化する慣習の媒体かつ結果である」 訳 53

「構造は拘束と統治されるべきものではない。そうではなくて、構造は常に拘束的かつ能力付与的なのである。」 訳 53

---

## ミニレポート課題

### 1、二重の解釈学の事例を、

文化社会現象を構成している日常的言語と、その現象を理解したり説明したりする学問的用語の例を自分の専門分野で挙げてください。

2、個人を構成している選択の不可避性の例を挙げてください。

3、あなたにとって最も重要な哲学的な問いを挙げてください。

=====